

タイトル：2022 年度教育セミナー（第 18 回）

日時：2022 年 9 月 15 日（木）～18 日（日）

### 「イラン民俗学研究」

竹原新（大阪大学大学院人文学研究科）

本セミナー講義では、イラン民俗学研究が扱う対象とその扱い方が理解できるようになること、および、イランにおけるフィールド調査の諸問題が理解できるようになることを目的として、昔話や伝説といった民話や呪術等の俗信に関する民俗資料を示しつつ、関連知識を含めて論じた。

まず、イランの怪談の昔話の事例を示した上で、イランには、我が国の「怪談」に相当する伝承の事例が存在するものの、「怪談」の概念が希薄であることについて論じた。また、イランで語られる伝説の事例を示しつつ、伝説の現在とのつながりについて述べた。

続けて、フィールド調査においては、採録地点数や収集事例数だけではなく、定点における長期間の人間関係の構築が重要であることについて述べた。調査者にとって、いわゆる時間軸が加わることにより、短期間の人間関係ではわからないことが理解できるようになることを実体験の紹介を交えながら論じた。

民話の採録において重要なプロセスである現地調査とテープ起こしに関する一連の作業について説明した。具体的には、採録の現場での調査者の取るべき態度に加え、採録後は現場の記憶が残っているできるだけ早い時期に必ず調査者が自分でテープ起こしをすること、いい間違いや筋が通らない言葉もすべてそのまま文字化する素起こしとすることなどについて触れた上で、ペルシア語の音声の資料化の難しさ、及び、面白さなどについて述べた。

調査者としての現場で注意すべき点についても説明した。調査者が「非日常ゆえの異質な存在」から「日常の中の異質な存在」にならないよう注意すべきであること、調査者の来訪者としての振る舞い方などについて述べた。技術的な問題として、録音機器の時代に応じた変遷、フィールド調査の際の服装、撮影機器の選び方、現場における話者とのコミュニケーションの取り方などについても触れた。また、調査者が抱えるプレッシャーの問題、あるいは、長年にわたって調査を行うことで起こりうる調査者側の問題などについて述べた。さらに、笑い話の事例を挙げつつ、時間の経過に伴う採録事例に対して調査者が受ける印象の変化についても論じた。

続けて、日本の俗信の事例と構造的に類似するイランの俗信の事例などを示しつつ、イラン俗信研究の方法について論じた。また、モハラム月の服喪儀礼に関して資料を示しつつ注目すべき点などについて述べた。

本セミナー講義を通して、イラン民俗学研究における資料収集および研究方法、また、イラン民俗学研究を続ける面白さについて一通り伝えることができたと思う。